特集

大阪湾・共同宣言で未来への一歩を

文・写真　加賀まゆみ（夢洲生きもの調査グループ）

いろいろな局面が動いた2024年11月だった。そして今、いままでばらばらにちらかっていた糸くずがまるで次第に寄り集まり糸になり、それが織られていくような予感のする2025年幕開けとなっている。

夢洲の生きもの調査は、港湾局同行での調査も2024年9月に終了。今後、万博会場の周囲には高い柵が設けられ、わずかに残っていた湿地には深さ1.5mの水がはられる。次の夏になってセイタカシギがやってきても、夢洲に営巣できる湿地はもう残されていない。私たち5団体は、「シギ・チドリが滞在できる場所を少しでも確保して」と港湾局・万博協会との話し合いを続けてきたが、最後はゼロ回答としか言えない結果で終わった。12月記者会見を行い、その結末を世間に公表するが、メディアの反応もない。（※5団体＝当協会と日本野鳥の会大阪支部・日本野鳥の会・日本自然保護協会・WWFジャパン）

この頭打ちの現実。しかし希望を持ち続ければ、どこかに突破口があるかもしれない。港湾局や博覧会協会との数回の面談、天王寺動物園などでの展示イベント、夢洲や新島への合同調査、夢洲フォトアルバムの毎年の発行など、一貫性のないように見えた活動だが、人につながり、団体間の関係を築いてきたことで、ともに立ち向かう素地が少しずつ醸成されつつある。

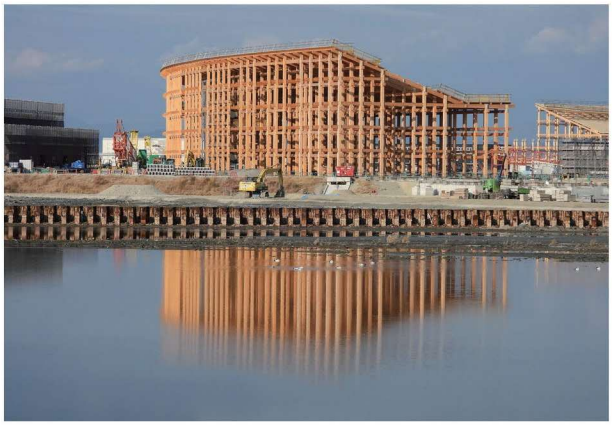
11月の大阪自然史フェスティバルのシンポジウム「みんなで守ろう！大阪湾岸に来る渡り鳥」では野鳥の会大阪支部との3回目の共催になり、世間に訴えるだけではなく、形になるものを残したい、という思いで取り組んだ。今回はすでに野鳥の会がコアジサシと同じような環境で営巣するシロチドリの激減を中心に考えたいという意向を持っていたので、そのテーマを膨らませる形で、シギ・チドリの渡来地を守るにはどうしたらいいか、講師たちと内容を打ち合わせる中で、今後の具体的な活動を検討。そのころ、行政との面談をいくら重ねてもらちが明かぬ状態がはっきりしてきたので、保護団体で共同宣言をまとめ、世間に出していこう、ということに決まった。

シンポジウム当日、文章は粗削りであったが、満場一致で大阪湾の生物多様性回復・自然の干潟・湿地を取り戻す共同宣言が採択され、その後、文章整理し1月中旬に宣言発表の運びとなった。次の2025年関西万博の持続可能性有識者委員会も見据え、少しでも共同宣言の効果があるよう、祈る気持ちで賛同団体を募っている。

また11月には大きな布石となるかもしれない突然の出会いがあった。国際花と博覧会記念協会が実施しているコスモス国際賞の第31回（2024年）受賞者に選ばれたケンブリッジ大学のサザーランド博士が、来日するにあたり、大阪の案内を頼まれた立命館アジア太平洋大学山下博美教授が、夏原会長を介して南港野鳥園訪問を依頼。博士は「エビデンスに基づいた保全」という概念で、地球規模で進行する生物多様性の減少を食い止める活動に寄与する革新的な知識の統合で先駆的な業績をあげている研究者。今回の来日に同行したパートナーのニコラ・クロックフォードさんは、世界最大の自然保護団体である英国鳥類保護協会のシギ・チド

11月13日、南港野鳥園で、高田博さんから説明を受けるサザーランド博士夫妻と通訳の山下博美さん（立命アジア太平洋大）

12月23日、大阪市政記者室にて記者会見を行う野鳥の会大阪支部長納家氏（右）と当協会垣井氏



2023年12月巨大リングが立ち始めた湿地に、この年も多くのツクシガモがやってきた。しかし数は例年の3分の1。調査の車は警戒するが、工事車両は気にしない。

2024年夏、残された湿地にこの年もセイタカシギが繁殖していた。この湿地から巣立つ最後のセイタカシギの子、8月15日に少なくとも12羽確認（成鳥は10羽）。

リ担当研究員。南港野鳥園訪問の当日、他用の夏原会長に代わって同行した私は南港野鳥園の高田博さんに促され、万博およびIRカジノ計画によって失われた大阪湾最大の渡り鳥渡来地である夢洲の現状を伝えた。すると日本はラムサール条約締結国であるのにどうにかならないか、東京でパートナー団体の日本野鳥の会と相談してみる、と言っていただいた。

その週末にシンポジウムがあり、東京からの講師陣にニコラさんの話を伝えたところ、私たちと共に港湾局等との交渉を進めていた日本野鳥の会の葉山さん、バードリサーチ守屋さんは、帰京後すぐ東京で夫妻と面談することになった。今後日本に対しどのようにアクションをするか、私たちともその後オンラインやメールで検討を続けている。国際的な絶滅危惧種ヘラシギを中心に、大阪湾奥の長年の蓄積データは、野鳥園の高田博さんが英国に提供されている。強力な助言者を得て、万博に際し国際シンポジウムを！という3年前の計画も、あながち無謀とは言えなくなってきた現在である。

2019年「今頃夢洲を保全したいと言い出しても無理」と言われた私たちの活動だったが、希望を失わず続けていたら少しずついろんな人につながってきた。現在は野鳥の会大阪支部長はじめ、たくさんの専門家がすでに同じ方向に向けて動き出し、だんだん形になって広がってきた感がある。夢洲の湿地を守りたい思いは、夢洲だけでなく、これからも開発され続けていく湾岸全体の生物多様性の問題につながる。大阪湾岸から日本の生物多様性の土壌を広げていくこと、これが大阪の自然保護団体としての私たちの使命ではないかと思っている。

私たちの思いでスタートした共同宣言は、1月15日現在、全国40以上の団体から賛同が寄せられ、今も増え続けている。夢洲から大阪湾へ、大阪から全国へ、この思いを広げていけたらうれしい。

（共同宣言は次ページへ）

大阪湾岸に生物多様性豊かな干潟や湿地をとり戻すための共同宣言

私たち環境保護団体は、陸域と海域をつなぐ沿岸部で、生物多様性の損失を止め、回復軌道に乗せるというネイチャーポジティブの実現のために

1. 残す

大阪湾岸に現存する自然環境は保護エリアとし、その維持保全に努め、未来に伝える

2. 創る

すでに開発し劣化した湾岸部においては、遊休地や低利用地などを自然回復の候補地に選定し、早期に自然海浜・干潟や湿地環境を戻す造成に着手する

3. 広げる

海岸や海上の埋め立てを伴う事業については、生物多様性の回復を第一優先課題として、開発面積と同等以上の湿地や干潟の造成を行う

ことを、関係機関に働きかけるとともに、あらゆる機会に、ネイチャーポジティブの理念を広げ、行政・企業・NGO・民間団体などの組織や市民とともに、連携・協力の場を広げ、知恵を出し合って、大阪湾岸に生物多様性豊かな干潟や湿地をとり戻していくことを、宣言します。

【趣旨説明】

1) ネイチャーポジティブとは

「自然と共生する社会」の達成に向けた2030年ミッションとして掲げられているネイチャーポジティブとは、自然を保護するだけでなく、社会・経済全体が生物多様性の保全に貢献するよう変革させ、自然を回復軌道に乗せていく考え方です（「生物多様性国家戦略2023-2030」）。

また、「昆明・モントリオール生物多様性枠組（GFB）」（2022年12月）では、ネイチャーポジティブ実現のための一つとして、2030年までに、陸と海の30%以上を健全な生態系として効果的に保全しようとする「30by30目標」を掲げています。わが国では国立公園や自然共生サイト制度を活用し、保護地域拡充に向けて努力しています。

大阪府域の現状の保護エリア（条例等に基づく地域指定の実面積）の割合は、陸域で府域面積の約24.6%です。しかし湾岸部においては、現在大阪府の海岸線全長の1%程度しか自然海岸がなく、生物多様性の損失を食い止め回復させるためには、相当思い切った取り組みが必須となります。

2) 沿岸生態系を保全する意義

沿岸域の自然生態系を指標するシギ・チドリ類は、世界的に減少が指摘されており、日本に渡来する個体数も激減しています。その大きな要因の一つは生息地である干潟や湿地の消失と考えられます。渡りをする水鳥たちは、その生息環境を開発で奪われ、埋め立て途上の水辺などを代替地として命をつないできましたが、その環境は不安定です。

大阪湾岸は「東アジア・オーストラリア・フライウェイ」の重要な中継地です。渡り鳥の生息地の保全は、国際的にも大きな渡りのルートを維持し、アジア地域の生物多様性保全にもつながります。

また、シギ・チドリ類を守ることは、その渡来地である湿地や干潟などの自然環境を守ることであり、それは生物多様性に富んだ地域の財産を守ることでもあります。海岸線の自然は風の道をつくり、ヒートアイランド化を軽減し、自然との触れ合いや環境教育の場としての役割も担い、人間にとっても貴重な場所を守ることにつながります。

3) 大阪湾岸のもつポテンシャル

大阪湾は古くから「魚庭（なにわ）の海」と呼ばれたほど生物多様性に富み、私たちはその恩恵を受けてきました。そして、瀬戸内海の東端に位置する大阪湾は、長年シギやチドリなどの水鳥の渡りの中継地や越冬地となっていました。

「南港野鳥園」は、50年以上前、埋め立て中の湿地に多くのシギ・チドリ類が渡来していたことから、その場所を守ってほしいと願う市民が立ち上がって作られました。この野鳥園は渡り鳥のために作られた人工干潟として、全国的にも先駆的な事例のひとつとなっており、近接する夢洲とともに大阪府の「生物多様性ホット

11月16日、自然史フェスティバルのシンポジウムで挨拶する夏原会長

11月16日、シンポジウムでトーク・セッションを行う守屋氏・納家氏・葉山氏（左から）

2024年11月の自然史フェスティバルの、このシンポジウムで、共同宣言をすることに決まった。

スポットAランク」に選定されています。

4）現在の危機的状況

2025年大阪・関西万博の開催地である夢洲は、20年以上にわたり、コアジサシやシギ・チドリ類など渡り鳥の大阪湾最大の渡来地となっていました。万博建設工事中の2023年5月から2024年9月にも、残されたわずかな湿地で、レッドデータブックに記載の鳥類51種を含む71種の鳥類が確認されています。しかしこの場所は、万博で「つながりの海」として利用された後、万博閉会後には大阪市によって完全に埋め立てられる計画です。

大規模な渡りのルートである大阪湾での渡来地の消失は、日本を通過するシギ・チドリ類の絶滅を加速させます。「いのち輝く未来社会」を目指しているはずの地元・大阪では、生物多様性の保全や維持についての配慮は全く図られないまま、渡り鳥たちはまた一つ貴重な生息地を失おうとしています。それは、私たちが生物多様性ホットスポットという貴重な財産を失うことも意味しており、これは、ネイチャーポジティブの理念に完全に逆行しています。

以上

2025年1月15日

公益社団法人 大阪自然環境保全協会
日本野鳥の会大阪支部
公益財団法人 日本野鳥の会
公益財団法人 日本自然保護協会
認定NPO法人 バードリサーチ
公益財団法人 世界自然保護基金（WWF）ジャパン

（順不同）

賛同団体・賛同者を募っています

3月末で取りまとめる予定。
詳しくは、協会ホームページ
⇒「夢洲の未来」
https://www.nature.or.jp/action/yumeshimamirai/

右のQRコードからご覧ください